

RETAILER ACADEMY NEWS

Mar 2018 | Bentley Motors Japan



FUTURE

ベントレーがEVで描く次の100年
ラグジュアリーの未来へ

ベントレー モーターズは、3月8日～3月18日に開催されたジュネーブモーターショーでベントイガ ハイブリッドを世界初公開し、EVによるラグジュアリーカーの未来について自らの方向性を示しました。

今

年のジュネーブには、ベントレーは特別な車両を持ち込みました。それがベントイガ ハイブリッドで、プラグインハイブリッド技術を投入した世界初のラグジュアリー SUVです。このクルマを発表したことにより、ベントレーがEV市場に参入することでエキサイティングな新時代を導くとともに、見る人にベントイガのラグジュアリーさやパフォーマンス、性能に関して将来を見据えた技術が生かされていることを示しました。(ベントイガ ハイブリッドの詳細はP4に掲載)

このほか、新型コンチネンタルGTやミルザンヌEWB(日本未導入)、フライングスパー W12なども展示。ベントレーコレクションの新作もブース内でお披露目されました。ブースには連日多くの方が足を運び、ベントレーのクラフトマンシップが大いに注目されたショーとなりました。

不変のベントレーらしさで
輝かしいラグジュアリー EVの未来へ

ジュネーブモーターショーではまた、2月1日にベントレー モーターズの会長兼CEOに就任したエイドリアン・ホールマーク氏が、就任後初めてとなるプレゼンテーションに臨み、ベントレー モーターズが現在、重要な岐路に立っていることを踏まえ、次のように話しました。

「私たちはベントレーを、ラグジュアリーカー市場を変えるリーダー的存在にしたい。これまでも私たちがそうしてきたようにです。世界で起きている変化が、より多様化していることは承知のうえです。今でもコネクテッドカーの技術は進化し続けていますし、世界中のお客様の考え方もさらに多様化しています。もちろん電化という面も同様です。こういったあらゆる要素が、ベントレーにチャンスをもたらしてくれています」

ベントイガ ハイブリッドは、技術や情報、エンターテインメントを求めるお客様の声に対し、迅速に応えたベントレーの姿勢を示したクルマです。ベントレーはこれからも引き続き、豊かでラグジュアリーなモビリティのソリューションを世界中のお客様に対して提供していきます。

ベントレーは来年、創業100周年を迎えますが、ホールマークCEOは「私たちの力強いEV戦略は、次の100年を成功に導く中核的なものとなります。それはエキサイティングな旅となるでしょうし、プラグインハイブリッドやEVの技術が急速に進歩し、お客様にはさらにラグジュアリーな選択肢を提供できることになります」と語りました。

ベントイガ ハイブリッドは、穏やかなドライビング体験を提供しつつ、お客様に曲がりくねった郊外や山道でのパフォーマンスと、市街地での静かで排出物の少ないドライブという、「2つの世界最高」を提供します。これまでベントレーが名声を得てきた絶妙なラグジュアリーとエフォートレスなパフォーマンスは維持しながら、電力を賢く利用し、排出物を大幅に削減するEVのみのラインアップを提供することも視



野に入れていきます。どんなに小さな部分でもラグジュアリーを感じられる。これこそが、世界をリードするラグジュアリーカーブランドに求められる唯一のことなのです。

2025年までには、ベントレーの全モデルにPHEVの選択肢を設ける予定で、約4分の1がこの技術を採用することになるでしょう。私たちの前には、輝かしい未来があります。これまでも革新へのコミットメントと情熱を合わせ、一世紀近くにわたって培ってきたユニークな技術とクラフトマンシップで、必ず実現できると考えています。



各社が個性的なニューモデルを発表した ジュネーブ・モーターショー 2018

去る3月8日から18日にかけて、第88回ジュネーブ・モーターショーが開催されました。今回は市販予定の新型車に加えて、スポーツカーメーカーによる電気自動車のコンセプトモデルが多数発表されるなど、将来を見据えた興味深いショーとなりました。

Mercedes-Maybach S-Class

メルセデス・マイバッハ Sクラス



現行のSクラスおよびメルセデス・マイバッハ Sクラスは、2017年にマイナーチェンジを実施。内外装のフェイスリフトや先進的な運転支援システムの装備をはじめとする改良が行われています。今回発表されたメルセデス・マイバッハ Sクラスでは、新たに縦基調のフロントグリルや新型ホイール、オプションの2トーンボディカラー、新色のインテリアカラーなどが設定されました。以前のマイバッハ 57/62を彷彿とさせるディテールを復活させることで、メルセデス・マイバッハの独自性をより際立たせています。

ベントレーに対する影響は？

マイナーチェンジから1年も経たないうちにエクステリアなどの意匠を変更するのは異例といえます。以前のモデルは通常モデルとの差異が少なかったため、今回明確な差別化を行うことでブランド力の強化を図ったものと思われます。その影響について注視すべき必要があります。

Audi A6

アウディ A6



アウディは、同社のアップミドルセダンである新型アウディ A6を発表しました。8代目となる新型ではボディサイズを拡大し、より広いインテリアスペースを実現しています。技術面での特長は、3.0 TFSI ガソリンエンジンと3.0 TDI ディーゼルエンジンの両方にマイルドハイブリッド技術を投入したこと。さらにアウディ A8で導入されたレベル3の自動運転技術、直感的な操作を可能にする「MMIタッチレスポンス操作システム」の導入が挙げられます。日本導入時期は未定ですが、本国ドイツでは2018年6月から販売が開始される予定です。

ベントレーに対する影響は？

広範囲なネットワーク化により実現したインテリジェントなルートガイダンスや日常会話に対応した音声認識技術などは、今後ますます重要視されていく分野です。4ドアセダンでは世界最高レベルの高性能を誇るアウディ RS6の登場も予想されるため、革新性に惹かれるユーザーが流れる可能性もあります。

Mercedes-AMG GT 4-Door Coupé

メルセデス AMG GT 4ドア クーペ



昨年のジュネーブでスタディモデルとして発表され、大きな反響を呼んだメルセデス AMG GT 4ドア クーペが、市販モデルとして発表されました。文字通りAMG GTの4ドア版という位置付けですが、プラットフォームはEクラスや新型CLSと共用で、駆動方式も4輪駆動のみとなります。GT 63 S 4MATIC+およびGT 63 4MATIC+に搭載される4.0L V8 ツインターボエンジンは、他のAMGモデルよりも高性能なチューニングが施されるのが特長。また、エントリーモデルとして3L 直列6気筒エンジンを積むGT 53 4MATIC+も用意されます。

ベントレーに対する影響は？

AMG GTの4ドアモデルというインパクトにより、他のブランドからの乗り換えが予想されます。実際には既存のEクラスやCLSのAMGモデルと重なる部分が多いため、AMG同士の代替も加速する可能性があります。4輪駆動のスポーツカーで実用性も高いという意味においては、強力な存在といえます。

Jaguar I-Pace

ジャガー I-Pace



ジャガーは以前から開発を進めてきた同社初のフルEVモデル、I-Paceを発表しました。コンパクトでスタイリッシュなSUVボディの内側には同社が設計したツインモーターの全輪駆動システムが備わり、合計最高出力400 ps、最大トルク696 Nmを発揮。0-100km/h加速4.8秒という実力を備えています。90kWhリチウムイオン・バッテリーを搭載し、航続距離は480km。インテリアもモダンで質感の高いデザインを採用。2018年からのワンメイクレース開催と併せて、ジャガーはEVスポーツカー市場におけるリーダーとなる可能性があります。

ベントレーに対する影響は？

コンパクトSUVの電気自動車であるI-Paceは、基本的にベントレーとは異なるカテゴリーです。ただ、現在ラグジュアリー SUVに乗るオーナーが将来的にダウンサイジング志向になった場合、同じイギリスの高級車ブランドであるジャガーのEVは、ちょうど良い受け皿になる可能性があります。

Mercedes-AMG G 63

メルセデス AMG G 63



2018年1月のデトロイト・モーターショーでデビューした新型Gクラス。ラインアップは4.0L V8 ツインターボエンジンを搭載するG 500のみでしたが、ジュネーブでは早くもAMGモデルのG 63が発表されました。エンジンは同じ基本設計ながら、最高出力はG 500の422 psから585 psに、最大トルクは610 Nmから850 Nmへと大幅に向上。新開発のAMG RIDE CONTROLサスペンション、AMG専用のトランスミッションモードなども装備されます。外観ではAMGパナメリカーナグリルが採用され、各部をブラックアウトしたAMG Nightパッケージも用意されます。

ベントレーに対する影響は？

ベンティガと直接競合する新型G 63ですが、優雅なライフスタイルを象徴するベンティガと、もともと軍用車ベースとして誕生したGクラスでは、キャラクターに大きな隔たりがあります。ただ、新型Gクラスは室内空間が広がり、乗り心地も大幅に改善されていると思われるため、快適性の向上は目覚ましいと考えるべきでしょう。

RANGE ROVER SV COUPÉ

レンジローバー SV クーペ



ルーファインをクーペ風に仕立てた4ドアのSUVクーペはいくつもありますが、このモデルはレンジローバーをベースにボディを2ドアに仕立てた真のクーペモデル。顧客が選択した仕様に応じてジャガー・ランドローバーのSVO（スペシャル・ビークル・オペレーションズ）が1台1台手作業にて生産を行う、999台の限定モデルです。最高出力565 ps、最大トルク700 Nmを発揮する5.0L V8スーパーチャージド・ガソリン・エンジンを搭載し、車高は通常のレンジローバーに比べて8mm低くするなど、パフォーマンスとスタイリングとの調和を図っています。

ベントレーに対する影響は？

バリエーション豊富なレンジローバー・ファミリーのなかでも、このモデルは同社のSVOが製造する極めてラグジュアリーな限定車。カタログモデルではありませんが、このようなフルサイズのスUVクーペは世界初で、ラグジュアリー SUVカテゴリーに新たな方向性を示すモデルといえます。

COMPETITORS INFORMATION

Porsche 911 GT3 RS

ポルシェ 911 GT3 RS



今回、電気駆動のクロスオーバースタディモデル「ミッションEクロスツーリスモ」を発表して話題を呼んだポルシェ。市販モデルでは、昨年発表した911 GT3をベースに改良を加えた、新型のポルシェ911 GT3 RSを初公開しました。排気量4.0Lの自然吸気エンジンは、先代モデルや911 GT3から20psアップの最高出力520 psを発揮。最高回転数は9,000 rpmに達します。トランスミッションは7速PDKとの組み合わせとなり、0-100 km/h加速3.2秒、最高速度312 km/hという圧倒的な動力性能を誇ります。

ベントレーに対する影響は？

モータースポーツ直系モデルのポルシェ 911 GT3 RSには、新型が出るたびに乗り換えるような固定客が多いため、ベントレーのマーケットとは基本的に競合しません。ただ、セカンドカーとしてのポテンシャルは極めて高いため、スポーツ志向の高いユーザーには魅力的なモデルといえます。

Ferrari 488 Pista

フェラーリ 488 ピスタ



360 チャレンジ ストラダレ、430 スクーデリア、458 スペチアーレの系譜を受け継ぐ、フェラーリV8スペシャルシリーズの最新作が488 ピスタ。FIA世界耐久選手権やワンメイクレースのフェラーリ・チャレンジにより得られたノウハウを注ぎ込んだこのモデルでは、ベース車両の488 GTBから90 kgの軽量化を実現。3.9L V8ツインターボエンジンの最高出力も488 GTBの670 psから720 psへと大幅に向上しています。空力デザインも見直され、ピークル・ダイナミクスではキャリパーのブレーキ圧を調整する新機能も搭載しています。

ベントレーに対する影響は？

これまでのフェラーリV8スペシャルシリーズはいずれも高い人気を誇り、リセールバリューもカタログモデルとしては驚異的です。その傾向は今回の488 ピスタでも変わらないはずで、資産価値の高さを狙って購入するユーザーは一定数存在すると思われます。

Lamborghini Huracán Performante Spyder

ランボルギーニ ウラカン ペルフォルマンテ スパイダー



昨年のジュネーブでウラカン ペルフォルマンテを発表したランボルギーニは、今回ロードスター版のスパイダーを発表しました。5.2L V10自然吸気エンジンは、ペルフォルマンテ クーペと同じ最高出力640ps、最大トルク600Nmを発揮。独自のフォージド・カーボンファイバー技術をはじめとする各部の軽量化により、車重はウラカン スパイダーから35 kg軽減されました。さらにアクティブ・エアロダイナミクス技術の採用などにより、0-100km/h加速は3.1秒、最高速度は325km/hと発表されています。

ベントレーに対する影響は？

2シーターのミッドシップスポーツカーであるウラカンは、基本的にベントレーとの直接競合はないモデルです。とはいえ、640psのV10自然吸気エンジンと4輪駆動システム、スパイダーボディを組み合わせたこのモデルは、クーペとは違う顧客層の興味を引く可能性があります。

TRAINING

新型コンチネンタルGTの 試乗研修を実施



ベントレー モーターズ ジャパンは3月22日、大磯プリンスホテル駐車場でベントレー東京のスタッフを対象とした新型コンチネンタルGTの試乗研修を実施しました。同日午後に行われたお客様向けの試乗会に先立ち、お客様と同じ試乗コースを走っていただくことで、お客様への説明に役立てていただくために実施した研修でした。

今回は、主に試乗中にお客様がわかりやすく違いを感じていただけるようにコースを設定。試乗のポイントを「3チャンパーエアサスペンション」「48Vアンチロールバー」「DCT」の3点に絞り、参加者に体験していただきました。



エアサスペンション

エア容量が従来比60%増となったことで、よりコンフォートに、よりスポーティに足回りを変化させられることをご理解いただきました。特にコンフォートモードでは、大磯プリンスの荒れた路面でもしっとりとした乗り心地を体験いただけたため、快適性が大幅に向上したことを実感していただきました。

48Vアンチロールバー

ベンティガにも搭載されている機構ですが、新型コンチネンタルGTは外から見ていてもコーナリング姿勢が変わらないことが一目瞭然でした。ブレーキング時のダイブも少なく、四輪を確実にグリップさせていることがうかがえました。参加者からは「コーナリング時は運転手はもちろんだが、それ以上に助手席に座った方の快適性も向上しているのではないか」とのコメントもいただきました。

DCT

ベントレー初採用のデュアルクラッチトランスミッション（DCT）ということもあり、参加者の皆さんが最も興味を持たれていた部分かもしれ

ません。実際に運転していただき、想像していたシフト時のショックはほとんど感じられず、トルコン式AT以上のスムーズなシフトチェンジを体感していただきました。「もう少しスポーティに反応が早い方が良さかもしれない」とのご意見もいただきましたが、コンチネンタルGTがグランドツアラーであることを考慮すると、かなりスポーティに改良されていると言えるでしょう。

今回の研修では、多くの参加者から「非常に良くなっている。スポーティだし快適性も向上している」という意図のコメントをいただきました。各リテラーでお客様向けの試乗会を開催される際には、ぜひこのように絞ったテーマを設けて体感していただく仕組み作りを心がけてください。

また、このような最新電子デバイスや初採用の機構だけでなく、従来型比136kgもの軽量化を実現していることや、ボディ剛性が向上していることなど、基本的な部分の大幅な改良もこのクルマのパフォーマンスにプラスに作用している点も、忘れずにお伝えください。



ジュネーブでベールを脱いだベンティガ ハイブリッド

ベントレー初のプラグインハイブリッド（PHEV）として、ベンティガ ハイブリッドがジュネーブモーターショーで発表されました。世界初のラグジュアリー SUVにおけるハイブリッドとしても大きな注目を集めたこのモデルにより、ベントレーはEV化に向けて第一歩を踏み出しました。

全く新しいパワーユニット

ベンティガ ハイブリッドには、非常に燃費効率の良い電気モーターと、3リッター V6 ガソリンエンジンを組み合わせたパワーユニットが搭載されています。電気モーターは、動力としての役割とジェネレーターとしての役割を担います。これにより、シームレスなドライビング体験と電気モーターのみでの十分な走行距離を提供します。

このパワーユニットを採用したことで、ベンティガ ハイブリッドはベントレー史上最も燃費効率に優れたモデルとなり、CO2排出量は75g/km（NEDC）に抑えました。電気モーターのみでの走行距離は、約50km（NEDC）です。

このPHEVは、ベンティガシリーズのW12、V8、V8ディーゼル（日本未導入）と同様にフルタイム4WDシステムと4種類の走行モード（スポーツ、Bentley、コンフォート、カスタム）を備えています。その一方で、スタート/ストップスイッチは3種類のEモード（EVドライブ、ハイブリッドモード、ホールドモード）を切り替えるスイッチに置き換えられました。このスイッチを切り替えることで、ドライバーは走行中のバッテリー残量などを管理できるのです。



EVならではの情報を表示

ベンティガ ハイブリッドでは、既存モデルとは異なる新しい情報をドライバーに伝える必要があります。この結果、インフォテイメント スクリーンとドライバー インフォメーション パネルを刷新。パフォーマンスとバッテリー消費量、動力源などの詳細を表示する設計となっています。

インフォテイメント スクリーンは、各Eモードでのエネルギーフローを表示し、バッテリーで走行しているかエンジンで走行しているかを示してくれます。また、充電が必要な場合はバッテリーへの回生の状況も表示します。

メーターパネルも専用設計になりました。従来のタコメーターは、電気モーターのみで走行しているかどうかの表示と、エンジンで走行している場合のエンジン回転数を示すものに置き換えられています。また、水温計はバッテリー残量計に置き換えられています。



高効率を連想させるエクステリア

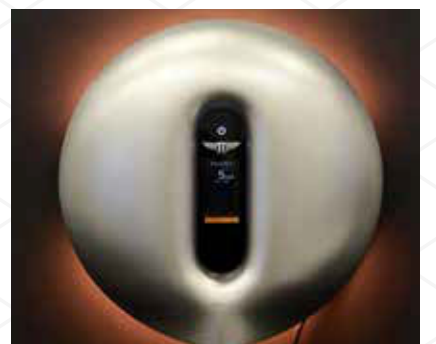
ベントレー史上最も効率的なモデルであることは、エレガントな外装のスタイリングによっても認識していただけます。フロントドア下部とテールゲート下部には銅色の「Hybrid」バッジを装着し、ホイールセンターの「B」マークとウィングド「B」バッジも銅色で仕上げられています。これがベンティガ ハイブリッドの新しいパワートレインの電気性能を連想させ、際立たせています。さらに、トレッドプレートにも「Hybrid」の刻印が入ります。



充電ドックも専用デザインを採用

家庭などでベンティガ ハイブリッドを充電する際に設置しなければならないのが充電ドックです。ベントレーはこの充電ドックにもこだわりました。デザインを担当したのは、さまざまな分野のデザインを手掛ける高名なデザイナーのフィリップ・スタルク氏。スタイリッシュな外周部分は熱硬化性樹脂でプレスされたエコリネンから形成され、ドーム型のフロントはアルミニウムをホットプレスで加工したものです。小型でエレガントな充電ドックは、充電ケーブルを自宅ですべて安全に保管できるよう設計されています。それだけでなく、PHEVを充電する行為にさえもラグジュアリーなタッチをもたらす、機能的なアート作品としてあらゆる家を飾るものとなるでしょう。

充電時間は、一般の家庭用電源では7.5時間で、産業用電源を引いている場合は2.5時間まで短縮可能です。（充電に関する日本仕様の詳細は未定）



新型コンチネンタルGT3が サーキットで初披露



注：写真はアラゴンサーキットでのテスト時に撮影したものです。

ブランパンGTシリーズの公式テストが3月13日と14日の2日間にフランスのポール・リカル・サーキットで行われ、新型コンチネンタルGT3が初めてサーキットに姿を現しました。ワークスチームであるベントレー・チームMスポーツのドライバー、Vincent Abrilも自身のツイッターにピットを出るコンチネンタルGT3の動画をアップ。ニューマシンによる2018年シーズンの開幕を待ちきれない様子でした。

テストでは、チーム・パーカーレーシングのコンチネンタルGT3（従来型）が全体のファステストラップを記録。開幕に向けて視界は良好なようです。ブランパンGTシリーズの開幕戦は4月20日～22日の耐久カップ（イタリア・モンツァ）です。今年も応援をよろしくお願いいたします！

新作アイウェアが登場 Bentley × Estede



ベントレー モーターズとオーストリアの高級アイウェアメーカー Estede社は2010年の提携以来、最高のスタイリングと最新技術を駆使した絶妙なクラフトマンシップを取り入れた、品質と完璧さに対する情熱を共有してきました。そのEstede社がこのほど、現代的で軽量かつトレンドに合わせたベントレー アイウェアの新作「B-Light」を発表しました。

新作のメガネとサングラスは、23.5カラットの金とパラジウムを融合したベータチタン製で、ミニマルでラグジュアリーなスタイリングを表現しています。B-Lightに使用されているチタンは、最高品質の素材のみを使用して日本にて手作業で作られたもの。そして独自のエナメルコーティングで覆った伝統的なダイヤモンドナールリングと「B」ロゴがデザインに組み込まれています。新作は60種類のカラーと素材から選ぶことができ、これはファッションのトレンドとベントレーのクルマづくりのDNAから影響を受けたもの。素材も貴金属や宝石、ウッド、水牛の角などさまざまで、高い技術を持つ職人たちが注文ごとに1つずつ手作りしています。



19MYのカラーチャートが完成しました



ベントレー モーターズはこのほど、19MYのカラーチャートを発表しました。チャートでは、63色の基本色「CORE RANGE」を「STANDARD（標準）」と「EXTENDED（オプション）」に分けて、各モデルに対応させてわかりやすく表示しています。25色のMulliner専用色は「MULLINER RANGE」として、単色とデュオトーンを表示しています。各カラーおよびカラー組み合わせには全て番号が付いており、一覧表でカラー名とプリファレンス番号を確認できます。

現在は全世界のお客様のうち約60%が、オプションカラーを選んでいますが、ベントレー モーターズではこれを90%まで引き上げ、残りの10%のお客様にはMullinerカラーをお選びいただくという目標を掲げています。リテーラーの収益増にもつながるものですので、積極的にオプションカラーをお勧めくださいますよう、ご協力をお願いいたします。

なお、19MYのカラーチャートは、リテーラー マーケティング ニュースからダウンロード（英語版のみ）することができます。ぜひ活用ください。



リテーラー マーケティング ニュース（英語）

<http://retailer.bentley.co.uk/content/dmn/en/news/news-from-crewe/paint-structure-chart-now-available.html>

フィリップ・スタルクがデザインした 日本のあのビル



ペンティガ ハイブリッドの充電ドックをデザインしたのは、さまざまな分野のデザインで活躍するフランス人デザイナーのフィリップ・スタルク氏です。スタルク氏はこれまで建築、インテリア、家具、食器などあらゆる物をデザインしてきましたが、実は日本国内でも彼の作品を見ることが可能です。

最もよく知られているのは、東京・浅草にあるアサヒビールスーパードライホールと、その屋上にあるオブジェ「フラムドール」ではないでしょうか。アサヒビールスーパードライホールは、アサヒビールの100周年を記念して、隅田川のそばにあった工場跡地の再開発で建設され、1989年に竣工したビルです。スタルク氏はこのオブジェに「アサヒビール社の燃えるような情熱を形にしたもの」との意味を込めてデザインしたそうです。



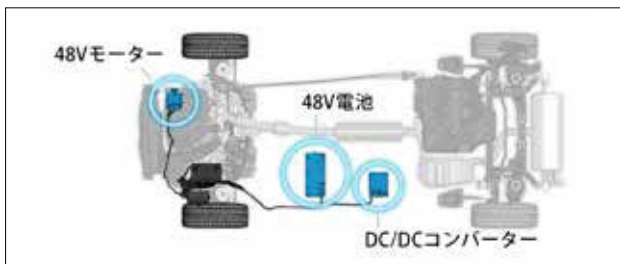
48Vシステム

3月に開催されたジュネーブモーターショーにおいてベンティガのハイブリッド・モデルが発表されたように、自動車の電動化の流れは決定的です。そうした中で、欧州が提案する電動化技術が48Vシステムです。コンチネンタルGTにも採用されるその技術を紹介します。



欧州発の電動化技術が 48Vシステム

年々厳しくなる燃費規制をクリアするために注目されているのが電動化技術です。日本では、プリウスに代表されるハイブリッドカーがすっかり定着していますが、欧州や北米での普及はまだまだ。そうした中で、欧州の自動車メーカーやサプライヤーが提案する電動化技術が48Vシステムです。従来のガソリン車に使われる電装系は12Vでしたが、それよりも4倍も高い電圧の48Vのメカニズムを従来の12Vの電装系とは別に備えようというアイデアです。電圧が4倍もあるので、発生できる力は12Vよりも大きくできます。そのシステムで減速エネルギーの回収やエンジン・パワーのアシストなどを行い、燃費性能を向上させます。システムは48Vのモーター、48Vの電池、電圧を調整するDC/DCコンバーターなどで構成されています。



基本的な48Vシステムの構成図。簡素なシステムでハイブリッド化が可能。

発展性が最大の魅力

48Vシステムの最大の美点は、優れた発展性があるところ。最も簡素なシステムは、従来のオルタネーターのところに、48Vのモーターを設置するもの。48Vのモーターがエンジン始動（スターター）、発電（ジェネレーター）、エンジン・パワーのアシスト、減速時のエネルギー回収を行います。エンジンを停止してモーターだけのEV走行は、ほんのわずかしかな行えませんが、安価にクルマをハイブリッド化することができます。

48VのモーターはISG（インテリジェント・スターター・ジェネレーター）と呼ばれることもあります。そして48Vのモーターをベルト駆動ではなく、エンジンとトランスミッションの間に設置するタイプも登場しています。この場合、モーターとエンジンの間にクラッチを設置すれば、モーター駆動のEV走行がより広範囲で可能になります。48Vシステムは、エアコンやオイルポンプなどの補機類にも利用できます。

また、燃費向上だけでなくパフォーマンスアップにも48Vシステムを使えます。それが電動スーパーチャージャーです。過給用のタービンを48Vシステムで駆動すれば、エンジン回転数とは関係なく、自在にエンジン過給が可能とな

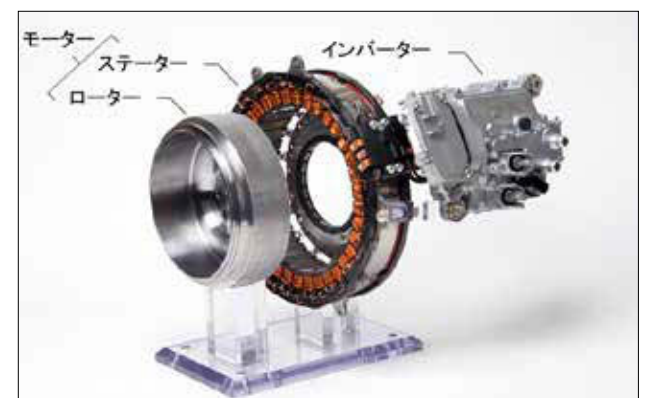


従来のオルタネーターの代わりに設置する48Vモーター。

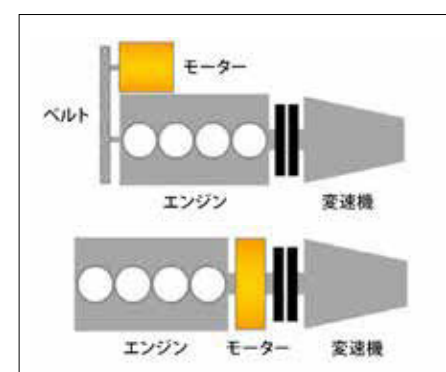
ります。それ以外にも走行状況にあわせてサスペンションのスタビライザーの強さを変化させることも48Vシステムでは可能です。

現在、ISGと電動スーパーチャージャーを採用しているのはメルセデス・ベンツ S450です。ISGはドイツのメーカーが統一規格を定めているため、ドイツ車を中心にISG採用モデルが増えることになるでしょう。

コンチネンタルGTに採用された「ベントレー・ダイナミック・ライド」は、まさに48Vシステムで作動しています。同じフォルクスワーゲングループの 아우ディとボルシェもアクティブアンチロールバーに48Vシステムを活用しています。このように48Vシステムは発展性が高いため、今後、さまざまな車種に採用されることが予想されています。



エンジンとトランスミッションの間に設置するタイプの48Vモーター。



48Vモーターは、ベルトを介してエンジンとつなぐ方法とトランスミッションの間に設置する方法がある。

メリット

- ・簡素で安価なシステムでハイブリッド化が可能。
- ・FF車だけでなくFR車など幅広い車種に対応する。
- ・補機類への電力供給ができる。
- ・過給機やシャシー制御に使ってパフォーマンスアップにも使える。

デメリット

- ・燃費性能向上率はストロングハイブリッドよりも劣る。
- ・モーターだけの力で走行するEV走行が苦手。
- ・採用が始まったばかりなので、将来どれだけ普及するかは不明。
- ・電動化がさらに進むと廃れてしまう可能性もある。